

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：32408

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02673

研究課題名(和文) 児童生徒の言語発達に基づく作文技術の系統化と作文カリキュラムの開発

研究課題名(英文) Systematization of writing skills and development of writing curriculum based on students' language development

研究代表者

森田 香緒里 (Morita, Kaori)

文教大学・文学部・教授

研究者番号：20334021

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、児童生徒の言語発達と作文技術の系統化を融合した作文カリキュラムとその評価法の開発を目的としている。研究成果として以下の3点をあげる。

(1)日本と英国の児童作文データを、相手意識とコミュニケーション方略の観点から国際比較分析した。学年が上がるにつれて、日本人児童は文構造レベルでの表現や多様なコミュニケーション方略を用いることを明らかにした。(2)国内外の作文教育関連図書と比較し、作文技術の配列について検討した。また情報活用を前提とした授業モデルを開発した。(3)作文の自己評価に関わるメタ認知の発達過程を調査した。また教師の作文評価パフォーマンスを分析し、評価言の開発の重要性を提言した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義や社会的意義は、以下の3点である。

(1)児童作文を日英2国間で国際比較分析し、作文に表出するコミュニケーション方略が多様化するという日本人児童の発達特性を明らかにした。(2)作文技術を情報活用と発達段階の観点で整理し、小中学校の授業モデルとして具体化した。これにより、情報活用能力を言語能力として捉え、発達の・系統的に育成するためのカリキュラムを提示した。(3)教師の作文評価パフォーマンスを分析し、児童生徒の言語表現を評価するための評価言の開発が必要であることを指摘した。ICT活用が進む学習環境において今後教師に求められるのは、指導言よりもむしろ評価言であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to develop a writing curriculum that integrates students' language development with the systematized writing skills and their evaluation methods.

The following three points are the results of the research.

(1) An international comparative analysis of students' writing in Japan and the UK was carried out from the perspectives of "awareness of the audience" and "communication strategies." It was found that Japanese students advance in grade level, they increasingly use expressions at the sentence structure level and a variety of communication strategies. (2) Through an international comparative analysis of writing curriculum, the appropriate sequencing of writing skills was examined, and a model for writing instruction was proposed. (3) The developmental process of metacognition related to self-assessment in writing was investigated. Additionally, an analysis of teachers' performance in evaluating writings revealed the need for developing evaluation criteria.

研究分野：国語科教育学

キーワード：作文技術 文章表現 相手意識 作文指導 作文評価 言語発達

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の作文指導では、「主題」「取材」「構成」「記述」「評価」といった書く過程の段階別に学習内容が決定されている。特に小学校でこうした傾向が強く、手紙文、報告文といった文種の配列で学年による発達段階を示しているのが特徴である。しかし、例えば意見文を書き上げるには、「要約」「論証」「例証」「構成」などの作文技術が必要になる。これらの技術はなかなか自然には習得されにくく、意図的で系統的な指導が必要になると考えられ、欧州では古くから習得すべき作文技術を古典修辞学に学び、作文技術の習得を基礎とした作文指導法が開発されてきた。このように作文指導を国際比較の観点で検討すると、日本の作文指導においては、育成すべき作文技術の明確化や系統化について十分に検討されてきたとは言いがたい状況にある。

研究代表者はこれまで、作文指導を国際比較することで日本の作文指導の特徴や傾向について指摘してきた。日本の作文指導がこうした特徴を持つ背景には、第一に、日本の作文指導が書き手の内面の表出という側面を重視してきた歴史的経緯に根ざしていること、第二に、作文技術がいわゆる「スキル学習」のように、書き手の実態を離れた技術指導の一環としてみなされてきたことなどが考えられる。研究代表者はこの点を、「スキル」(習得すべき作文技術)と「コンピテンス」(児童生徒の表現技能の発達)の乖離と位置づけ、それらを統合した作文カリキュラムを開発しようと試みた。

2. 研究の目的

上記の問題意識に基づき、本研究では、児童生徒の言語発達に基づき作文技術を系統化し、作文カリキュラムの開発および評価法の検討を行うことを目的とする。

具体的手順としては、まず児童生徒の作文データを分析し、「コミュニケーション方略」という観点から作文能力の発達過程について検討する。作文教育やレトリックに関する国内外の諸研究を検討し、作文技術の系統性について検討する。に関する授業モデルを構想し、試行する。作文評価の方法について調査・分析を試みる。

3. 研究の方法

(1) 児童作文の国際比較分析

これまでに日本と英国で調査・収集した児童生徒の作文データを分析した。特に「相手意識」と「コミュニケーション方略」の観点で分析し、日本人児童の表現能力の発達過程の特性を明らかにすることを試みた。

(2) 国内外の作文教科書や作文研究の比較検討

日本の学習指導要領や教科書における作文単元、作文研究に関する先行研究等を検討し、作文技術の系統性について考察した。また、英語圏の作文教科書や作文研究とも比較し、作文技術の配列や系統性について検討した。

(3) 段階的・系統的な授業モデルの開発と試行

(1)(2)を踏まえ、2017年告示版学習指導要領における「情報の扱い方に関する事項」の指導事項と作文指導とを関連させた、段階的・系統的な授業モデルを考案した。小中学校と協働で試行し、成果発表を行った。

(4) 作文評価法開発のための調査・分析

学習者による自己評価、および教師の評価の実態を調査し、分析した。特に前者は、小学生の作文の自己評価においてメタ認知がどのように発達するかについて調査した。また後者については、教師の作文評価パフォーマンスを調査した。これらの調査結果から、作文評価の方法に関する示唆を得た。

4. 研究成果

上記の(1)～(4)に従って研究成果を述べる。

(1) 児童作文の国際比較分析

日本と英国の児童作文を比較分析し、相手意識やコミュニケーション方略の観点から、作文能力の発達過程について検討した。その結果、日本人児童は、学年が上がるにつれて文構造レベルでの表現や多様なコミュニケーション方略を用いるという発達特性を明らかにした。

(2) 国内外の作文教科書や作文研究の比較検討

国内外の作文教科書や作文研究を比較し、作文技術の配列や系統について検討した。日本の作文指導が作文産出過程や文種に基づいていること、また英語圏に比べて「例証」の作文技術が比較的早期に導入されていること等を明らかにした。

(3) 段階的・系統的な授業モデルの開発と試行

(1)(2)の成果を踏まえ、小学校・中学校国語科における「情報の扱い方に関する事項」に着目し、作文指導に連動させる方法について検討した。情報活用を前提とした言語技能や作文技術の諸要素を抽出して小中学校の発達段階ごとに配置し、段階的・系統的な授業モデルを構想した。小中学校の国語科教諭らと協働して授業モデルを試行し、その成果と課題を一冊の編著にまとめた。

発表した。

(4)作文評価法開発のための調査・分析

作文の自己評価における学習者のメタ認知の発達過程を調査・分析した。その結果、小学生低学年では内容面、中学年・高学年では語彙選択や文構成面でのメタ認知が行われることを明らかにした。さらに、小中学校の国語教師を対象に作文評価パフォーマンスを調査したところ、論理的文章の評価において、論証の不十分さへの評価が少ないことが明らかになった。これらの結果から、学習者の論理表現に対する発達段階に応じた評価言の開発が、今後の作文指導において必要であると指摘した。

今後の課題としては、ICT活用を前提とした作文技術の育成段階を再検討すること、また評価言を含めた教師の評価パフォーマンス法の開発などがあげられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 森田香緒里	4. 巻 53
2. 論文標題 論理的文章に対する教師の作文評価パフォーマンスに関する研究	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 文教大学国文	6. 最初と最後の頁 36-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森田香緒里	4. 巻 604
2. 論文標題 「参照する力」の育成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田香緒里、飯田和明、見目真理、綱川真人、古西はるか、牧野高明、芳田潤、渡邊留美子	4. 巻 9
2. 論文標題 対話的な学習活動を通して「参照する力」を育てる国語科授業の創造 「情報の扱い方」に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 455-459
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森田香緒里	4. 巻 607
2. 論文標題 学習者の問いと学習材化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 12-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田香緒里	4. 巻 48
2. 論文標題 児童作文における相手意識とメタ認知：発達の観点からの検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学教育研究	6. 最初と最後の頁 39-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15068/0002006537	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森田香緒里、山野有紀	4. 巻 7
2. 論文標題 教科横断的視点に基づく小学校教員養成カリキュラムの開発のための教科間連携研究(6) 小学校外国語活動と国語の連携授業(2)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 437-442
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森田香緒里	4. 巻 7
2. 論文標題 教員養成課程における国語表現指導 4年生を対象とした基盤教育科目「論理表現の技術」の実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 455-458
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森田香緒里	4. 巻 46
2. 論文標題 日英児童作文における相手意識の発達過程：コミュニケーション方略の国際比較分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文学教育研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15068/00159110	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森田香緒里、山野有紀	4. 巻 6
2. 論文標題 教科横断的視点に基づく小学校教員養成カリキュラムの開発のための教科間連携研究(4) 小学校外国語活動と国語の連携授業	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	6. 最初と最後の頁 447-450
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 3件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 森田香緒里
2. 発表標題 学習者の言語表現を捉える視点
3. 学会等名 第145回全国大学国語教育学会信州大会、課題研究発表(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森田香緒里
2. 発表標題 子どもの文章表現における相手意識とコミュニケーション方略
3. 学会等名 文教大学国文学会国語教育研究集会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤森裕治、白坂洋一、香月正登、森田香緒里
2. 発表標題 「言語生活者」を育てる国語科授業－学習者中心の言葉の学びに向けて－
3. 学会等名 第85回日本国語教育学会全国大会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浮田真弓、甲斐雄一郎、森田香緒里、長田友紀
2. 発表標題 比較国語教育の新たなパラダイムを求めて
3. 学会等名 第137回全国大学国語教育学会仙台大会、ラウンドテーブル
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 藤森裕治、甲斐雄一郎、森田香緒里、他	4. 発行年 2024年
2. 出版社 東洋館出版	5. 総ページ数 236
3. 書名 これからの国語科教育はどうあるべきか	

1. 著者名 森田香緒里	4. 発行年 2023年
2. 出版社 明治図書出版	5. 総ページ数 166
3. 書名 小学校・中学校国語科「情報の扱い方」の全学年授業モデル	

1. 著者名 森田 香緒里	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 330
3. 書名 書くことの指導における相手意識の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------